

たそがれ清兵衛

映画文学人生論

原作：藤沢周平 「小説新潮」(1983-88)
監督：山田洋次 (2002年) 脚色：山田洋次 朝間義隆
出演：井口清兵衛 真田広之 撮影：長沼六男
飯沼朋江 宮沢りえ 音楽：富田勲
井口萱野 伊藤未希 余吾善右衛門 田中泯
井口以登 橋口恵莉奈 晩年の以登 岸恵子

いやあ、つまらん男だのう、

「たそがれ」は

藤沢周平『たそがれ清兵衛』の読後感はさわやかだが、ストーリーはやや単調で、ものたりない気がした。映画のほうが面白い。なぜだろう。

清兵衛は病妻をいたわって、飯の支度や掃除、洗濯や内職の虫籠づくりで忙しく、昼の城勤めでは居眠りをするところがある。同僚からたそがれ清兵衛と陰口をたたかれような冴えない男だが、実は剣をとらせると、無形流の達人だった。

その腕をかわれて、海坂藩で専断行為の目立つ筆頭家老堀将監の上意討ちを命じられ、見事に役目をはたした。その功績により妻を山の湯宿で療養させることができ、妻は健康を取り戻す。という心あたたまる話だ。

ところが、山田洋次監督の映画では妻はすでに死んでいる。清兵衛は頭がぼけた母親と幼い娘二人をかかえて、家事と内職で忙しい。そこへ飯沼朋江（宮沢りえ）があらわれる。

朋江は清兵衛（真田広之）とは幼なじみだが、他家に嫁いで、離縁となり、実家に戻っていた。「いやあ、つまらん男だのう、たそがれは」と馬鹿にされていた清兵衛と美しい朋江とのロマンスという原作にない要素が映画には加わっている。原作では病妻の名前は奈美だ。朋江ではない。

藤沢周平の他の短編を読んでもみると、『ごますり甚内』の妻が朋江、『祝い人（ほいと）助八』



たそがれ清兵衛

映画文学人生論

の恋人が飯沼波津である。これら二篇の女性のイメージがミックスされた女性のようだ。

また、映画の清兵衛が上意討ちを実行する相手は家老の堀将監ではなく、一刀流の余吾善右衛門（田中泯）となっている。余吾は切腹を命じられたが、自宅に引きこもって反抗し、討手を斬殺した。新たな討手に選ばれたのが清兵衛。

しかし、貧窮して、刀を売ってしまったので、竹光で上意討ちにのぞんだ。原作にはない設定である。しかも、相手の余吾は最近、仕官したばかりの新参者で、長い間、妻子をかかえて浪々の暮らしをし、妻は労咳で死んでしまったという。討手も討たれる者も似たような境遇なのだ。

この挿話は藤沢周平の短編『竹光始末』からとられている。さらに、原作の『たそがれ清兵衛』が斬ることになっている堀将監は山田洋次監督の映画『隠し剣鬼の爪』では片桐宗藏（永瀬正敏）に斬られるが、その原作『隠し剣鬼ノ爪』で宗藏が斬るのは御旗奉行の堀直哉だ。まるで多元的宇宙をさまよっているような気がしてくる。

映画『たそがれ清兵衛』のラストは老女になった娘（岸恵子）の墓参り。朋江を妻に迎えた清兵衛が幸せに暮らせたのは三年だけ。戊辰戦争で官軍の鉄砲に撃たれて死んだ。そんな父を誇りに思うと娘が語る後日譚だ。これも原作にはない。

討つ人もたそがれてゐる薄かな